



2017.12.18

鈴木 恵一

風をうけて

## risk と danger



今年度中に第2回避難訓練があります。

いつも思い出すのは、東日本大震災。2011年3月11日(金)14時46分発生でした。あの日あの時、ぐらっと揺れた瞬間、私は大通高校2階の教頭席に座っていました。新校舎に移って間もなく1年が立とうとしている頃でした。その日はちょうど札幌市教育委員会の教育長が新校舎見学で来校されていました。

上階はやや強い揺れだったようです。2階にいた私は「あれ？ なんか、めまいが……」

職員室内では「地震？いま揺れたような気がする」「うん、地震みたいだね」「震源地は遠そうだね」案外、のんきな会話だったことを覚えています。私は「誰かテレビつけて！」と指示し、教頭席横にある緊急放送用のマイクを手にしました。テレビ画面の地震速報では、震源が東北地方（三陸海岸沖）である旨の情報が流れていました。

「授業中ですが、緊急放送です。静かに聞いてください。只今の地震は、東北地方を震源とするもので札幌には大きな影響はありません……」

その後、テレビにかじりついて地震速報を見ていたら、刻一刻と恐ろしい状況になっていく様子が映し出され、自分の人生で見たこともないほど巨大な津波が押し寄せ、甚大な被害が広がっていることを知りました。今もなお不自由な生活を強いられている方々や、身近な人の亡骸が見つからず曖昧な喪失感を持ち続けている遺族の方々がいることを思うと胸が痛みます。

### ◆管理できること、管理できないこと

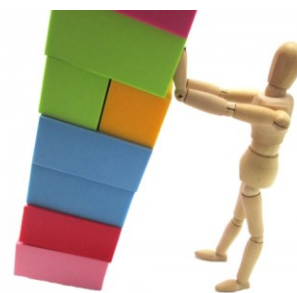
「備えあれば憂いなし」という言葉は、いつも災害後に教訓として強調されます。それがいつしかその気持ちは薄れ、世代交代が進むと記憶も風化していきます。事故や災害が起こるたびに、各種の不備が指摘され、“リスク・マネジメント（危機管理）”をより一層強化することの大切さが叫ばれています。

防災研修に参加した際、「**リスク(危機)管理とデンジャー(危険)対応**」を学んだことがあります。

リスクというのはコントロール( control 管理・統制 )でき、そこをしっかりとればヘッジ( hedge 回避・軽減 )の成功率が高まる。だからリスク・マネジメント( 計画－組織－統制の一連の活動 )は重要だ。

しかし、デンジャーはそうではない。「こうすればうまくゆく」という方法が常に流動的・可変的だということです。事件・事故や被災・避難の実体験がない人、紛争・戦争体験(日本においてはかなり特殊な例)がない人にとって、“デンジャー対応”はとても難しい課題だともいえます。

「経験・体験は宝」とはいえ、誰も本物の悲惨な体験なんかしたくないし、一生ないほうがいいに決まっています。



多くの人が集まる学校も、いろいろと考えるべきことがあります。しかし、あまり神経質になると不安ばかりが増幅してしまいます。デンジャーの多くは想定外の出来事です。先日、小学生がグラウンドで体育の授業を受けていたら米軍ヘリの部品が落下してきました。安全だと思っていた学校が、一転して危険地帯と化すわけです。

災害時、崩れ落ちた瓦礫に埋まっている人、水に流されている人を助けるには、救助・手当のための気力、体力、知識、技術も必要です。そして瞬時の判断ができるかどうかで生死を分けます。今まさに津波が押し寄せているさなか、グラウンドに児童を集めて点呼を取っていたら津波に流されてしまった……という事例は、リスク管理とデンジャー対応がうまく噛み合っていなかった典型ともいえます。

これを単なる悲惨な出来事として終わらせると、教訓にはなりません。私たちにできることは、考え得る事態をシミュレーション(模擬体験・訓練)することです。大地震、テロ、ミサイル……自分ならどうするか考えてみてください。不意のできごとに対して、走って避難するのか、身をかがめてじっとするのか、瞬間の判断力が求められます。人助けをするにしても、自分の身の安全を確保することが最優先です。

